イリノイ大学での図書館

経済学部教授
田　中　嘉　穂

図書館について普段から無関心な部類に属しますので、突然発言するのも妙ですが、利用者の一員ではありますので、その立場から気楽な印象記を述べることとします。

1992年1月から、アメリカのイリノイ州にある州立大学で研修することができました。College of Commerce and Business Administration でのビジターとして8ヵ月を過ごしました。

キャンパスの所在地は人口10万人足らずの地方大学町ですが、学生だけで約3万5千人（そのうち院生が1万人弱）ですから、半分近くが大学関係者といえます。敷地は広大で、本学全キャンパス（付属学校を除きます）のおよそ5倍といっても実感がわきませんが、実感ではそれよりはるかに広い感じです。もの珍しさから、盲が象をなでるように大学の諸施設を隈なく見て回ろうとしたのですが、とうてい無理でした。

推察しますに、大学の構え方が、日本の大学とかなり違うというのが率直な印象でした。学内には、ローカルの空港、7万人収容のアメリカンフットボールの専用スタジアム、1万人以上収容する屋内体育館、飛込みつき公式プールが屋内外にある総合体育施設、屋内トラック、アイススケートリンク、大中の3ホールがある劇場、重厚な学生会館（会議場、ゲストの宿泊施設、学生用ロビー、カフェテリア、直営の本屋・売店、ボーリング場、ビリヤード場、コンピュータ・ゲーム機などがある）、散在するテニスコート、ジャングルのような公園、美術館、博物館、ゴルフ場…などがあります。夜間の11時でも照明をつけてテニスをしている気まぐれな（と思われる）学生を見ていると、日本の感覚では、学校というより「学生の根城」というほかない、と呆れました。

いっこうに図書館の話になりませんのは、以下の印象記はこのような背景事情との関連で見ていただかないと、図書館が果たしている役割を理解していただけないのではないかと考えたからです。

個室がなかったこともありますが、図書館は何かにつけて快適な活動拠点になりました。図書館について何よりも驚きましたのは、図書館が果たしている機能の幅広さ、奥行きの深さでした。ただし、専ら中央図書館とその周辺での経験にすぎませんが。

入退館の風景は本学とよく似ていまして、雑誌類を含めてかなりの本が開架式であるのもそれほど変わっていません。しかし、利用の便となると違いがあります。検索のためにインデックス類がかなり充実していますし、検索用端末もかなり配置されています。そのそばに、交替で専門の司書がいて検索相談にのってくれます。文献コピーのシステムは、券売機から自分でコピー用カードを購入し、それを閲覧室内に数台あるコピー機に差込んで自分で使うという仕組みです。時々故障すると、面倒臭そうに担当者が対応してくれるのに少々困りましたが、一般雑誌を含みかなりの定期刊行物のバックを直に見て、その場でコピーできるのが快適でした。学生も、宿題で雑誌文献をよく読まされますのでよく利用します。

閲覧風景で珍しかったのは、学生が大型の机を囲んで大きな声で何か話をしていたことです。初めは異様に思われましたが、それは、あるテーマについて「グループで討論し、その結果を提出せよ」と学生に課される宿題をやっていたのでした。いつもこの光景が見られましたが、閲覧室のスペースが十分ありますので、ちょっと離れた仕切りのある机にいけば、気にはなりません。

スペースといえば、その広さが羨ましい限りでした。特に間仕切りはありませんが、ソファーの散在するコーナーで学生が寝たり自由な姿勢で読んでいたりします。パソコンのコーナーではどうやら講義らしいのもありました。自分のパソコンも持込めます。ビデオを鑑賞するコーナー、語学テープを聞くコーナーもあります。大きな辞書・基本図書類と新聞の閲覧はそれぞれ別室でしたが、留学生が母国語の新聞をよく読んでいます。朝日、読売の2紙が愛読できました。

ちょっと珍しかったのは、論文の校正をしてくれる専門家がいるコーナー、学生による相互扶助のボランティア・グループを紹介する Counseling Center 職員が座っているコーナー、学生の思い思いの疑問に掲示で解答するコーナーなどでした。論文の校正サービスには気がつくのが遅くて、1回1時間ずつのサービスをしてもらえなくて惜しいことをしました。学生グループの紹介というのも私達には変わっていますが、紹介しているグループは生々しいものでした。近親者

の自殺・死別で悩む人、性的倒錯で悩む人、身体障害者の支援者グループ、文化・人種の違いで悩む人、論文の仕上げで座礁した人、最近復学した女性グループ、変わったのでは男性問題のグループなどですが、公式の機関で扱われているのが驚きでした。

開館時間は、場所によって多少違いますが、学期中は月～木で8：00～23：00（場所によっては早朝1：00まで）、金は8：00～17：00、土は12：00～17：00、日は13：00～23：00でした。時間内・外によらず窓口勤務は、大抵は学生のアルバイトで、こういう職務につくと授業料が免除してもらえるという恩典があります。深夜でも煌々としていて、学生が右往左往していました。

図書館一つ取上げても、上から下まで何でも揃っているというのが実感ですが、やはり固有の背景事情との関連で見るべきものと考えました。

図書館と私

教育学部4年
松　田　さおり

私は、あまり本を読むのが好きではなく、小学生の頃など夏休みの宿題で読書感想文を書くのに苦労してきました。いつも本を読み始めると、どこからともなく睡魔がやってきて、私をのみこんでしまうかのごとく、あっという間に夢の世界へ引き込んでしまうのでした。こんな私ですから、自主的に本を読むということはほとんどなく、図書館へ通った経験は皆無にひとしいといっても過言ではない程でした。

しかし、香川大学に入学してからは何度となく附属図書館や市立図書館へ足を運ぶようになりました。というのも、レポートを書くための資料を手に入れるためだからですが・・・でも、毎週毎週このように図書館へ通っているうちに、徐々に自分の探している本以外の本にも目がいくようになり、気付いた時には、目的のものとは違う本につい夢中になったりということもありました。

私は、小さい頃から現在に至るまで本をあまり読まなかったことに対して、今大変後悔しています。代表的な小説でさえ、題は知っているが内容は全然といっていい程知らない状態なのです。本当に恥かしい限りです。今となっては、卒論等で忙しくてほとんど本を読む時間もとれず、こんな無知なまま社会人になっていいのだろうかと、大変心配になっています。後悔先に立たずと言うことを改めて実感しました。

私は、これからも図書館を卒論等の作成のための専門的知識を得るためと、趣味・教養の幅を広げるために利用していきたいと思っています。大学の附属図書館ということで、古い資料から新しい資料まで豊富に専門図書がとりそろえられていて、専門的知識を得るのに役に立ちますし、趣味やその他の未知の世界を切り開いてくれそうな本を探すのにも最適な場所ではないかと思います。

私の大学生活も、もうあと1年をきりました。社会人とて恥かしくないような人間になるために、もっとたくさんの情報を得るために、この香川大学附属図書館を最大限に利用し尽したいと思っています。

図書館入退館管理システムについて

このたび、附属図書館中央館及び農学部分館に入退館管理システムが入りました。当システムは、図書館利用者の動向を知るための各種統計を取ることで、今後の図書館運営に活用しようというものです。それに伴い図書館利用証が必ず必要となりますので、ご協力お願いします。

本学教官著作寄贈図書（平成5年11月～6年4月末迄受付分）

寄贈者	書名	発行所	発行年
辻　唯之（短　大）	戦後香川の農業と漁業	信山社出版	1993
後藤紀一（法　学）	要論手形小切手法	信山社出版	1992
富永浩之（経　済）	awkでプログラミング	オーム社	1993
伊丹正博（名誉教授）	地域経済史研究	伊丹正博	1993